

都市文学としての懷風藻

吳 哲 男

き表現は、和歌に先行して漢文学の方法として『懷風藻』によって先取られていたとみなし、次のように指摘している。⁽²⁾

『懷風藻』は、自然を〈賞翫〉の対象としているところに特徴をもっている。和歌が可能としていった自然の美の発見は、おそらく漢文学の〈賞〉の方法を通して見出していったと思われる。

私はこれらの所説に対し基本的に同意するが、あえて異をとねえるとすれば、右の徴候が奈良朝初期、すなわち古代都市の達成としての平城京の成立に対応する形で顕在化している点を重視したい。都市の成立が、「自然」に対するパラダイムの転換をもたらしたと考えたいのである。

いうまでもないが無人称の自然それ自体は聖でも俗でも美でも醜でもない。自然が「賞翫」すなわち審美の対象となるためには人称的な「風景」への変換を必要とする。『懷風藻』の「賞翫」の用例がそのことを端的に示している。

春日翫鶯梅（葛野王・詩題）

未翫此芳春（犬上王）

对翫入松風（藤原史）

近年、古代和歌における「叙景」の発生の問題に関連して、辰巳正明は、柿本人麻呂の吉野行幸従駕歌（万・卷二・美一五）を基点に据えながら、そこに『文選』や『芸文類聚』にみえる「遊覧」の概念を導入して、奈良朝初期の行幸従駕歌（詩）の場での「叙景」の発生の可能性を論じている。この主張は、結果的には中西進説を補強するものになっているが、そこへ至る過程として「遊覧」の方法を詳細に展開し、一つの成果をあげている点は高く評価することができる。⁽¹⁾すなわち、辰巳氏によれば次のごとくである。

奈良朝初頭に至り、一方に吉野遊覧詩が詠まれ、一方に吉野従駕歌が詠まれることで、この時代に吉野遊覧の詩歌の盛期を迎えたという事実は、奈良朝初頭においても吉野行幸に〈遊覧〉という場が定着したことを示すものである……。〈中略〉その淵源は人麻呂によって整えられた吉野の宮廷儀礼歌にあるが、その折の天皇鑽仰に発する表現が〈遊覧〉を場とすることによって叙景化へという新たな展開を見せることになる。

また、一方で辰巳氏は、このいわば新しい自然の発見ともいうべ

花鳥堪沈翫（中臣人足）

山水翫芳春（守部大隅）

ここで「賞翫」の対象となっていてのはいずれも自然の景物である。しかし、自然の景物が美的対象として人間的な価値が付与されるためには古代都市の成立を不可欠とする。なぜなら都市の悪と醜を経験した者だけが自然の美の積極的な発見者たりうるからである。藤原万里（麻呂）の詩はそのことを劇的に示している。

城市元無_レ好

林園賞有_レ余

彈_レ琴仲散地

下_レ筆伯英書

天霽雲衣落

池明桃錦舒

寄_レ言礼法士

知_レ我有_三麤疎_一

（五言。暮春於弟園池置酒。一首。并序）

「城市元無好 林園賞有余」に注目していただきたい。意味するところは、人や塵にまみれた都（平城京）には元来善しとする処がないが、この林園の風景は賞するに余りがある、というのである。⁽³⁾この一首には序があつて、そこでも「僕聖代之狂生耳。直以_三風月_一為_レ情、魚鳥為_レ翫。貧_レ名狗_レ利、未_レ適_三冲襟_一」⁽⁴⁾といつて、都会の人間関係に対する悪意を表明している。「城市」や「名利」の反対概念として「林園」「風月」「魚鳥」があることから判明するよ
うに、「自然」（風景）は都市生活者が都市に敵対する中で発見したものである。しかも「風月」や「魚鳥」といったありふれた事物

が新しい風景として発見されるためには「僕聖代之狂生耳」と宣言することが必要であつた。「狂生」とは具体的には花鳥風月や洒を愛する脱俗「風狂」の徒を意味するが、より本質的には普段見慣れた光景を非親和化する局外者のまなざしであり、リアリズムの精神である。

それでは藤原麻呂の生涯が右の詩にふさわしいアウトサイダーとしてのそれであつたかといへば、『懐風藻』の記す「從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣万里」の官位が示すように、彼の四十二年（公卿補任）の生涯は、不比等の第四子として常に中央政界の内側^{インサイド}に生きた人間であつた。それでは、詩に詠まれた都市への明らさまな悪意の宣言は単なるポーズにすぎないのかといへば、事態はむしろ逆で、名門貴族として体制の内側に生き都市の頹廢と醜に身をさらしつつ、漢詩文の教養の蓄積によって美的なものに対する鋭い感受性をもつ麻呂のような人物こそが見慣れた光景の中から新しい「風景」の発見を可能にするのだ。すなわち、藤原麻呂に代表される都市の貴族階級の感受性こそ「林園」「風月」「魚鳥」の中に積極的な価値を見出すのである。このような意味で、自然を「賞翫」の対象とするところに特徴をもつ『懐風藻』は、言葉の正しい意味で「都市の文学」なのである。この点の評価なくしては『懐風藻』の十全な理解はあり得ないであろう。

二

ところで、すでに気づかれたことと思うが、「賞翫」の対象となつた自然は、天然の自然ではなく人工的に囲い込まれた自然、すなわち庭園の景物である。

開衿臨靈沼 遊目步金苑 (大津皇子)

玉管吐陽氣 春色啓禁園 (巨勢多益須)

園裏看花李 冬條尚帶春 (文武天皇)

琴酒開芳苑 丹墨点英人 (田辺百枝)

水清瑤池深 花開禁苑新 (石川石足)

雲浮天裏麗 樹茂苑中榮 (背奈王行文)

宴飲遊山齋 遨遊臨野池 (中臣大島)

雖盡林池樂 未翫此芳春 (犬上王)

結宇南林側 垂釣北池潯 (紀末茂)

鼓柷遊南浦 肆筵樂東浜 (藤原総前)

池台慰我之寶 左右琴樽 (藤原宇合)

これらの詩はいずれも宮中や貴族の庭園、その庭園の景観を詠んだものであるが、『懷風藻』は大半がこうした表現によって占められていると、過言でない。

当面問題としたい、『懷風藻』に十七首を載せる吉野詩との関連でいえば、庭園が都市の貴族の反都市的志向を都市の内部に導き入れたものだとすれば、それを都市の外部に転移したところに見出されたものが吉野詩に詠まれた自然ということになる。しかし、理論的にはそのようにいうことは可能であるが、歴史的な流れとしてはむしろ逆で、自然はまず吉野行幸從駕歌(詩)に象徴されるように「聖なる次元」として把握され、その聖性が衰退した結果、美的な次元、すなわち庭園の風景として再生したものと考えられる。

吉野詩の自然は、天皇の徳を賛美する聖なる次元、すなわち儒教的コスモロジーによって表現されているところに第一の特徴がある。

諸性担流水 素心開静仁 (藤原史)

惟山且惟水 能智亦能仁 (中臣人足)

山幽仁趣遠 川淨智懷深 (大伴王)

鳳蓋停南岳 追尋智与仁 (紀男人)

地是幽居宅 山惟帝者仁 (大津首)

周知のように、これらの表現はいずれも『論語』雍也篇の「子曰、知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。」の応用であるが、原始儒教においてすでに山水の自然は貴族が特権的に所有するものであった。それはともかく、吉野が「山水」の清浄の觀念で把握されているのは、『万葉集』の吉野齋歌が「清」なる表現を不可欠とすることに対応している。吉野の自然はまず天子の聖性の発現として表現されたのだ。

かつて、吉野行幸從駕歌(詩)のこうしたあり方が漢代の賦の表現様式をふまえていることを指摘したことがある。⁽⁴⁾「天子の首都を頌歌する都市の裝飾文学としての賦」⁽⁵⁾は、本来的に国讚めの呪歌であり、吉野齋歌(詩)がその様式をなぞっているのは自然であるが、問題は六朝の山水詩人と称され、『文選』の「遊覽」のジャンルを代表する謝靈運が漢代の賦の様式の延長上にある詩人であったということである。謝靈運は「山居賦」の序(『宋書』卷五七)において、従来の賦の対象であった京都・宮觀・遊獵等の裝飾的な羅列表現はやめて、山野・草木といった自然を「叙景」の対象として表現すると宣言し、次のように述べている。

山居良有異乎市廛。抱疾就閑、順從性情、敢率所樂而以作賦。楊子雲云詩人之賦麗以則。文体宜兼以其美。今所賦既非三京都宮觀遊獵声色之盛而叙山野草木水石穀稼之事。

……覽者廢_レ張左之艷辭、尋_レ台皓深意、去_レ飾取_レ素、儻值_レ其
心_二耳。

この試みは「山居賦」においては、賦の羅列表現の様式をなぞっ
ているために必ずしも成功したとはいえないが、この写真精神がや
がて山水詩の叙景を可能にしたことの意義を考えると、やはり「山
居賦」は中国文学史における画期的な転換点に立っていたといえよ
う。賦の様式から叙景詩への転換の重要性について小尾郊一は次の
ように述べている。⁽⁶⁾

……これらの自然描写は、漢代の賦の延長と言わざるを得な
い。ただ漢の賦においては、自然現象、自然物が、遊獵とか都
邑描写の背景となっていたが、魏晉になると正面に押し出され
て、いわゆる詠物的になって来ている。……漢賦においては、
司馬相如の「子虚」の賦のように「其の山は……」「其の土は
……」「其の石は……」と、こまかく羅列して追求する方式
は、やがてある一物について、それをこまかく写し出そうとす
る方向に向って行くものである。かくて、彼らは賦の性格に引
きずられて、身の周辺の珍獣や奇鳥、一木や一草を克明に描写
するようになったと思われる。……この自然物を克明に述べん
とする写实的傾向は、人々の自然美鑑賞の眼を、大いに開かせ
てくれたことであろう。

かかる傾向の延長に自然を美の対象とした謝連運の詩が生まれた
のだが、ここでは『文選』の「遊覽」の中から一例だけあげておこ
う。

遊南亭一首 五言

時竟夕澄霽

雲_レ帰日西馳
密_レ林含_レ余清_一

遠_レ峰隱_レ半規_一

久_レ惱_レ昏墊苦_一

旅_レ館眺_レ郊岐_一

沢_レ蘭漸被_レ逕_一

芙_レ容始発_レ池_一

未_レ厭_レ青春好_一

已_レ覩_レ朱明移_一

戚_レ戚感_レ物歎_一

星_レ星白髮垂_一

藥_レ餌情所_レ止_一

衰_レ疾忽在_レ斯_一

逝_レ將候_レ秋水_一

息_レ景偃_レ旧崖_一

我_レ志誰與亮_一

賞_レ心惟良知_一

『懐風藻』の「賞翫」は右の詩にみえる「賞心」をふまえたもの
であるが、この点についての論証はここでは触れなくておくことに
する。

三

人麻呂の吉野行幸従駕歌と『懐風藻』の吉野(行幸従駕)詩の間
にはいくつかの共通点が指摘できるにもかかわらず、両者は本質的
には性格を異にするものである。それは、古代都市(平城京)の成

立を画期とする「自然」の認識へのパラダイムの転換として考えることができる。言い換えれば、前述の中国文学史における漢代の賦から六朝時代の謝連運の山水詩への転換と重ね合わせて考えることが可能だといってもよい。人麻呂の歌が漢賦をなぞったものであるのに対し、吉野詩では謝連運の「賞心」が前提されていることとである。中国文学史が数百年の時間を費して獲得したものを、日本の古代文学が藤原京から平城京までのわずか数十年の期間に体現してしまふのは、一見すると不合理のようにも思える。しかし、八世紀の日本ではすでに古代都市の達成として、東アジアとの均質空間が実現されており、しかもそこでは『文選』という歴史性を抽象した、空間化された文学の一覧表が読まれていたのである。

いうまでもないが、『文選』は紀元前五世紀の東周から六朝時代までの文学作品を集成した一大詞華集であるが、その歴史性は捨象され「賦・詩・騷・七・詔・冊・令・教・策文・表……」以下三十七体の文体に分類され、さらに「賦」は「京都・郊祀・耕籍・畋獵・紀行・遊覽……」、「詩」は「補亡・述徳・勸励・献詩・公讌……」と徹底した分類意識によって編集されている。いわば時間を空間に変換した書物である。したがって、八世紀の日本ではこれを容易に受入れることが可能であったと考えられる。

しかし、これは必ずしも時間と空間が任意に変換しうるものだということを意味しない。

人麻呂によって歌われた吉野の自然は、天子の徳の横溢する聖地として機能している。離宮の壮麗な宮殿は、人麻呂の手にかかれれば古代律令体制の推進者である持統帝の意志と生命力と徳の横溢する根源の場所に化する。吉野の自然は、ここでは律令秩序の象徴であ

り、儒教的コスモロジーの表現であった。しかし、たとえば大津首の次のような吉野詩は、右の人麻呂の歌のあり方とは異質である。

地是幽居宅

山惟帝者仁

潺湲侵石浪

雜沓応琴鱗

虚懷対林野

陶性在風煙

欲知歎宴曲

満酌自忘塵

(五言。和藤原大政遊吉野川之作)

まず「地是幽居宅」に注目したい。吉野の地は世の中をのがれてひっそりと住むすまいのような所であるという意であるから、「幽居」の語は「満酌自忘塵」の「塵」に対するものであり、われわれの文脈でいう「都市」の醜さや偽りからの離脱を志向する表現である。都市からの離脱を志向するがゆえに「林野」や「風煙」は賞翫の対象となってくる。したがって、大津首の詩にあっては天子の徳を賛美する「山惟帝者仁」はもはやつけたしにすぎないといえる。人麻呂の歌にはついに見ることでできないこうした転倒はどのようにして生じたものであろうか。

六朝時代の文学史家である劉勰は、『文心彫龍』の中でいみじくも「荘老告退、而山水方滋」(明詩篇)といている。これはいわば、一つの風景(山水)が成立するためには一つの觀念(老荘)が後退すること、すなわちパラダイムの転換を必要とするといっているのだ。

奈良時代に入ると、律令制の矛盾は班田収授法の弛緩や農民の本籍地からの逃亡・放浪という形で顕在化してくる。こうした現実を目のあたりにした都市の知識人たちは、かつて人麻呂が持統天皇に自己同一化して熱っぽく歌ったようには歌えないであろう。

持統紀によれば、持統天皇の吉野行幸は三年一月に始まって十一年四月の八年間に実に三十一回を教え、吉野への異常な執着をみせる。ところが、続日本紀によれば、持統天皇以後の吉野行幸は大宝元年二月の文武天皇から天平八年六月の聖武天皇までの三十六年間にわずかに六回しか行われていない。ここに、吉野を聖地とする政治イデオロギーの中心の喪失とその衰弱をはっきりとみてとることができる。

吉野詩は、実質的には奈良朝初期のこの期間に詠まれたものであるから、そこにイデオロギーの後退に代わる新しい風景の成立を見出すことができる。それは都会の塵雑から離れた清らかな「山水」の風景として概括することができるものであった。

注(1) 「柿本人麻呂の吉野讃歌と中国遊覧詩」(『上代文学』48・49号)「自然と遊覧」(『大東文化大学紀要』23号)など。

(2) 「懐風藻の自然鑑賞」(『東洋研究』75号)

(3) 大意は小島憲之校注『懐風藻』(日本古典文学大系)による。

(4) 「苑の系譜」(『文学』54巻2号)

(5) 大室幹雄『劇場都市』

(6) 『中国文学に現われた自然と自然観』244ページ。

(7) 大意は(3)に同じ。

「古代文学」総目録

23号(昭和五十九年三月三十一日発行)

特集〈祝詞・宣命〉

延喜式の祈年祭の祝詞について―その成立の時代― 尾崎 暢殃

〈罪〉〈けがれ〉と「大祓詞」―古代の〈罪〉・ノート(統)―

多田 一臣

ヨゴト―事象表出の言語―

西条 勉

日嗣の次第―統紀、即位の宣命―

犬飼 公之

万葉五・六番歌考―表現主体と歌の様式―

〈浦島子〉の位相―古代表現史論の試み―

〈詩語〉としての和歌表現―『歌経標式』の模索―

83年度夏期セミナー

『なぜ表現は変わるのか―古代文学の表現史2―』経過・総括・発表要旨

発表要旨

増田 茂恭

斎藤 英喜

野田 浩子